
あなたが笑っていただける世界のために（戦国BASARA）

ひまうさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたが笑っていられる世界のために（戦国BASARA）

【Nコード】

N0990V

【作者名】

ひまうさ

【あらすじ】

凍死しかけた私を助けてくれたのは農村に住む優しい少女、いつきだった。恩返しに一揆に手を貸すことをきっかけに、否応なく戦に巻き込まれてゆくことにー。

一応、逆ハー狙いです。主人公は最初こそシリアスですけど、崩壊させてく予定。

2011.10…予定変更で、片倉オチで打ち切ります。このヒロインじゃどうしたって無理だと気がついたので。

ゲームをしたことのない作者がアニメとプレイ動画だけで書くので、キャラが違うことが多々あるかもしれません。ご容赦ください。

※メインサイトでは名前変換ありで掲載しています。

1#いつき

雪の中、凍える寒さが身に染みる。

このまま死んでしまえたら楽なのに、と夢現で考えた。
どの程度北まで来たのだろうか。

人目を避けて北上してきたので、今がどこなのかわからない。
途中の道で拾った地図もなくしてしまっただけ。

(もう、いいかなあ)

誰にともなく問いかける。

痛覚も麻痺して、自分がいまどういう状態なのかわからないが、
五体満足とは言えないだろう。

三年前までは姉夫婦と一緒に暮らしていたけれど、二人とももういない。

彼らの願いを引き継いで、私はこの国の憂いを集めては浄化をし
続けてきた。

誰かに感謝されることもなく、むしろ厭われる仕事だ。

誰に理解されないけれど、そうしなければたくさんの人が死ぬの
だと姉様が言ったから。

彼女がこの世界を護ることを望んでいたから、ひとりですつと頑
張ってきた。

でも、もう限界だ。

「……ねえちゃん……ねえちゃん」

誰かの声が聞こえる。

可愛らしい少女の声だ。

これは、いよいよお迎えが来たのだろうか。
どうせ来てくれるなら、姉上のほうが良かった。

「今夜が峠だろうなあ」

「こんなに若いのに、可哀想な娘だべ」

ざわざわとひどい訛りが私を囲んでいる。
どうやら、まだ迎えは来ていないらしい。

重たい瞼をゆっくりと開けると、雪のような銀の髪を高い位置で
二つ結わえた奇妙な娘が、私を覗き込んでいた。

「あ、気がついたか!？」

いかにも純朴そうな優しい顔の少女は、不安そうに私を見ている。

「おめえさ、村外れで行き倒れてただ。
覚えてるか？」

なんと返すこともできないまま、私は目を閉じる。
胸にあるのは、助かってしまったのかという残念な想いと、助か
ったのかという何故か安堵する想い。

まだ、生きなければいけないのだと、誰かが私を生かしたのだろ
うか。

次に目を覚ました時、すっかり私の熱は引いていた。
凍傷になりかけていた手足は既に治りかけでかゆい。
温かい寝床と常人より高い回復力のおかげで、すでに起き上がる
ことは出来た。

「助けていただいて、ありがとうございます」

私が礼を言うと、昨日見た少女ははにかんで、愛らしく笑った。

「困ったときはお互い様だべ」

差し出された湯気のたつ椀を前に、私は戸惑った。

少し見た感じでも、この村はそれ程富んではない。
冬の間の食料を私がいただいてもいいものだろうか。

「たくさん食べて、早く元気になるべ」

さあと、押し付けられた椀には白粥だけが入っていて、具材は何も無い。

だけど、口に含むと暖かさがとても身に染みて、泣きたくなった。
こんな風に人の温かさに触れるのは、いつ以来だろう。

「なに、泣いてるだか？」

不思議そうに問われ、私はただ首をふることしかできなかった。
一口一口を大切に食べてから、ほうと息を吐く。

「こんなに美味しい御飯は久しぶり……」
「だべ!？」

急に少女が勢い込んで目の前に来たので、吃驚した。

「だのに、お侍はなんもわかってねえべ!
おらたちがいなければ食う物にも困るに、なして戦なんかするん

だべっ！」

何かのスイッチでも入れてしまったのか、一気に捲し立てられて、私は目をぱちぱちと瞬かせる。

北上してきたから、この辺りは伊達か上杉あたりの領地だし、それほどひどい統治ではないと聞いていたのだけれど、現実にはいろいろと格差もあるのか。

「……馬鹿だからじゃないですかね」

目の前で始まってしまった議論に口をはさむでなく、小さく思ったことを呟くと、急に辺りが静まり返った。

「あ、や、殿様がとかそこまでは言いませんけど、仕えている侍に關してはそこまで頭を使っているとも思えないし……」

何かまずいことを言ってしまったのかもしれない。

これは、ヤバい、かな。

「えーっと」

「アンタ、名前はなんて言うんだべ？」

「葉桜、ですけど」

「私はいつき」

徐に両手を拘束される。

これはいよいよまずいぞ、と思ったところで彼女はにっこりと笑った。

「アンタ、このまま暫時うちに泊まるべよ」

「へ？」

「どこか宛てがあるわけじゃないべ？
だったら、春まで……いや、雪解けまでいるとええ」

ものすごく愛想の良くなったいつきに戸惑いつつ、周囲を見回す。
だが、私は何かを言う前にそれは決定してしまったらしく。

「よろしくな、葉桜！」

「ええと……はい、よろしくお願いします……？」

なんだか有耶無耶のうちに、私はいつきと暮らすことになったのだった。

一緒に暮らしてみると、いつきは見た目通りにとっても気持ちの良
い娘だった。

働き者で、明るくて、優しくて、正義漢が強くて。
そして、不思議なことに人を従わせてしまう魅力がある。

だからだろうか、手を貸す気になってしまったのは。

「いつき、本当に一揆を起こすの？」

真剣に頷く彼女に、私は迷った末の答えを出す。

「……私も、手伝っていいかな。
怪我の治療ぐらいならできるし」

だけど、いつきはなかなか頷いてくれなかった。

「葉桜はこの村のもんじゃねえ。
巻き込むわけにはいかねえべよ」

「でも、ずいぶん世話になったし、恩返しをしたいよ」

うーんと唸ったいつきは村の皆と相談してくれた。

そして、私はいつきの起こす一揆に参加することになったんだ。

この時もしも参加しなければ、と考えたこともあった。

でも、いつきに助けられた時点できっと全ては決まってたんだと思う。

世の名だたる武将たちに会うことも、その中に否応なく自分が巻き込まれることも。

「ねえ、いつき、私絶対に役に立つから」

もしもこの先、私の持つ力のことでいつきに嫌われたとしても、今その力になれるというのなら、きっと後悔しない。

そんな決意を固める私に、いつきは優しく笑いかけてくれた。

「無理はするんじゃないべ、葉桜」

年下なのに、年上みたいに優しいいつき。

あなたが信じてくれるなら、私はあなたのためにこの力を使おう。

1#いつき(後書き)

長くなる予定です。

元ネタのゲームはやってませんが、プレイ動画で見て回って、キャラ回収中。

前回もそうすりゃ良かった……orz

(2011/07/22)

2 #武器は舞扇

部屋に何人も運び込まれる怪我人に、治療が間に合わない。
それが私を動かした。

「私、行ってくるよ」

救護用に使っている小屋を出ようとした私を村人たちは止めよう
としてくれる。

最初は順調だった一揆も伊達軍が来てからはかなり押されて、今
は元の村にまで退いてしまっていた。

それに皆疲労の色が濃くて、もうダメだと誰もが諦めかけていて。

このままじゃ、いつきまでダメになると思った。

自分の唯一の持ち物である舞扇を手し、小屋を飛び出す。

目の前をいつきが吹き飛ばされたのはその時だった。

いつきが相手取っているのは強そうな侍二人で、確かに持ちこた
えてはいるけど時間の問題であるのは明白だった。

「っ！」

葉桜！？」

いつきの前に立ち、私は舞扇を構える。

「何してるだ！」

アンタが戦うことねえって言ったべ！」

後ろで引きとめようとするいつきではなく、目の前の侍二人に、

私はにやりと笑いかける。

一人は隻眼の青年で、格好から察するに伊達政宗で間違いないだろう。

それよりも、私は彼の隣にぴたりと陣取る顔に傷のある強面の男のが怖い。

状況から鑑みるに、片倉小十郎だろうか。

「やっぱり、いつき一人でなんて戦わせられないよ。
私にも手伝わせて」

あっけにと取られている二人を前に、私はくるりと舞い踊る。
私を中心にふわりと空気が軽くなり、いつきの驚く声が聞こえた。

「……葉桜……」

私の力ー癒しの舞で、おそらくいつきの怪我は少しでも回復したはずだ。

「黙っててごめん。」

でも、これ以上見てられなかったの。

いつきは、死なせないっ！」

ふわりと宙を飛び、私は片倉小十郎に舞扇を振り下ろす。

それを素手で受け止めた片倉は一瞬眉を顰め、だが、そのまま受けた腕を振り払った。

「私は葉桜と申します。」

片倉様には悪いですが、私に付き合ってくださいますよっ」

どう見てもただの舞扇にしか見えないけれど、それを受けた片倉こそが威力を知っている。

今は容易にへし折ることもできない強度の武器となっていることを。

向かってくる片倉の一撃を舞扇で受け止めると、びりびりと腕がしびれた。

それでも手放さなかったのは、それが死を意味するからだ。

何度目かの斬撃を繰り出してから、一度片倉が攻撃を止める。

私は、すでに体力の限界で、体中で荒い息を繰り返す。

「アンタ、この村のもんじゃねえだろ」

「よく、わかりましたね」

「どこのものだ」

「いつきに、拾われただけの旅の者ですよ。」

「少しだけ身を守るすべを知っているだけの」

「女一人でか」

「私が女に見えますか？」

「……男なのか？」

私は息を整えなおし、強く地を蹴って踏み込みながら応える。

「いいや、女ですよ！」

さすがとか弾き飛ばされ、それでも受身をとって、構えは崩さずに対峙し続ける。

「そこまでして、何故ここの味方をする」

息がなかなか整わないのはもう、仕方がない。

さつきから力を使い過ぎた。

そろそろ終にしなければ、いつきを助けられない。

「いつきは、恩人なんです。

だから、この命をかけても守り通させていただきます」

ぱっと舞扇を広げ、構えを戦闘のものから舞踊へと変化させる。

そのまま、流れるように地に舞い、力を貯めこむ。

片倉は攻撃してこない。

私の出方を見ているのか、それともあっけに取られているだけか。

（後者だろうな）

くすりと私の口元から笑みが零れる。

「いつき、受け取って」

いつきに届かないのを承知で囁き、貯めた力をいつきに投げ渡す。
力は光になって、いつきへと吸い込まれ。

「何!？」

私が地についたときにはいつきが伊達政宗を吹き飛ばしたところだった。

私はというと、そのまま地に崩れ落ち、目の前に刀を突きつけられながらも顔を上げて笑う。

「てめえ、何をしやがった」

喉にちくり、と切っ先が刺さる。

「妖術使いか？」

「ある意味、似たような、もの、かも」

この戦で勝っても負けても、ここにはいられなくなるのを覚悟して、私は笑っていた。

いくら恩返しとはいえ、自分でも過ぎたことをしているのはわかっている。

「民あってこそその国だからこそ、私はいつきたちのような者を助けたいの。」

貴方達侍なんて、勝手に殺し合って、死ねばいい」

片倉は私の暴言を黙って聞いているだけだった。

他に何かを言いたかったけれど、眩む意識がそうさせてはくれないくて。

どさりと雪に倒れた私は自分を抱き上げるものがいた事をしらなかった。

いつきが敗れたことも、知らなかった。

目が覚めてから、いつきにそれを聞かされた。

それでも、晴れやかな彼女の笑顔に救われて、それから人目を避けて、村を後にした。

2 #武器は舞扇（後書き）

片倉と互角かちよい下に戦闘力を位置づけようと思ったけど、あまりに強すぎるので、体力を削りました↑削りすぎ

（2011／07／23）

3 #竜に攫われて

「H e y! アンタが葉桜か？」

村を出て少しして、奇妙な馬に乗った男が近づいてきた。

戦装束のままの伊達政宗だ。

隣には片倉もいる。

「こんなところでなにしてる」

伊達政宗の問いに、私は自然と笑顔になっていた。
嬉しい訳ではないというのに。

「いつきを、殺さないでくれて、有難うございます」

私は雪の中で膝を付き、深々と頭を下げた。

「伊達政宗様には大変なご無礼をいたしました。

どうぞこの身をお気の済むようになさってください。

もしいつきに責があるというのならば、私一人にそれを負わせて
くださいませ」

二人は何も言わなかった。

しばらくして、馬から降りた誰かが私の肩を叩いて、顔を上げさせる。

「政宗様は、何故アンタが守った村を逃げるように離れるのか、と
聞いておられるのだ」

片倉の顔を見上げながら、私はただ笑うしかできなかった。

「……あののどかな村に、私のような化け物は必要ないのです。いつきのためにも、私はもう彼女から離れたほうが」

ほろり、と目元を水の玉が転がり落ちた。

こんなところで本心が転がり出ることなどないのに。

顔を背け、目元を拭って、もう一度二人を見据える。

口を開いて、何かを言おうとしたが、言葉を発するとまた泣いてしまいそうだった。

一步、彼らから距離を取り、徐に舞扇を広げる。

それから、無言のままにふわりと一節舞い踊る。

ひらりと揺れる扇に合わせて流れるのは、癒しの力。

いつきは伊達政宗たちを信用していた。

だから、もう敵ではないから、私は自分の持つ癒しの力で彼らを癒す。

そう、ここにいる二人の他、彼らを護る影の者も含めて、全部、だ。

終わって直ぐ、ぺこりと頭を下げた私に伊達政宗が馬に乗ったまま近づいてくる。

「アンタ、旅をしてるんだったな。

これからどこへ行くんだ。

決めてねえなら、うちに来い」

ゆっくりと頭を上げた私は、静かに首を振った。

「政宗様、私のような下賤の者に情けは無用です。

それから、どのように頼まれようともこの力を戦で使うつもりはありません」

「使ってたじゃねえか？」

「侍のために使う力などないと言っているのです。

片倉様に言いましたが、私は侍が大嫌いなのですよ」

薄く微笑みながら、私は伊達政宗を鋭く睨みつける。

それを彼はどこか面白そうに見返す。

「じゃあ、何故今俺達の怪我を癒すような真似をした？」

何故？

「いつきならば、それを望むからです。

いつきは政宗様が平和な世を作ってくれと信じています。
だから、これっきりです」

暫時私を見ていた伊達政宗は、次の瞬間笑い出した。

「小十郎！葉桜を城に連れていくぞ」

「な！？」

抵抗する間もなく、次には私は伊達政宗の腕の中に抱えられ、馬上にいた。

「戦に出ろとは言わねえ。

だが、今アンタにできた借りは返させてもらうぜ」

「何言ってるんだ、オマエ……」

思わず素に戻ってしまった私の目の前で、伊達政宗は口端をあげて、小憎らしい笑みを浮かべている。

「俺はアンタが気に入った。

何日でも城にいればいい」

「政宗様！」

咎める片倉を無視して、馬は走りだす。

いや、馬、なのだろうか。

よくわからないが、違和感がある。

「て、手綱をとれ！手綱を！」

よく見れば、伊達政宗の両手は私の腰に回されている。

つまり手放して馬のスピードが上がっていくわけで。

風に振り落とされそうなのが怖くて。

「怖いなら、俺にしがみついてろ。

何、落としやしねえさ」

言われるまでもなく私が伊達政宗に抱きつくと、彼はなんでか私を抱く両腕に力を込めていて。

「だから、手綱を握ってくれーっ！」

城までどのぐらいの距離があったのかわからなかったが、それはとてつもなく長い時間だった気がする。

あれほど死にたがっていたのに、振り落とされる恐怖が優って、気がつけば必死で伊達政宗にしがみついていた。

馬が止まったことにも気がつけないで。

「Welcome 米沢城へ」

耳元で囁かれて、ぞわっと全身の毛が逆立った気がした。

慌てて顔をあげると、それはもう楽しそうに笑っている伊達政宗がいて。

「さようなら」

「おっと、そうはいかねえぜ」

私の腰に回された腕はびくともしないどころか、抱き潰す勢いで締まっていた。

誰か助けてくれる人と視線を彷徨わせて見つけた片倉は、諦めろとでも言うように首を横に振っている。

そりゃあ、一度は敵対した身だけれど、なんでこんなことになったのだろうか。

「離せっ！私は絶対お前らなんかに力を貸さないからなっ」

ぎっと睨みつけると、伊達政宗はますます楽しそうに笑う。

「別に、アンタの力なんかなくなっただって、かまわねえぜ。

そんなもんなくなっただって、俺は天下をとってやる」

それは私に取って意外な言葉だった。

だから、暴れることも言葉を紡ぐことも忘れ、見入ってしまう。嘘を言っているようには見えなかった。

だが、口ではそう言っているにも、現実にはどうなのか。

そういう場面を幾度と無く見てきた者としては、本気で信じられないわけがない。

3 #竜に攫われて（後書き）

タイトルを馬にするか誘拐にするか迷った末に、こうなりました。
センスなくて、申し訳ない……orz

次の更新はもしかすると、時間かかるかも。
引越があるので。

でも、できるだけ間隔を開けずに更新する予定です。

（2011／07／24）

4 #女中が付きました

怪訝そうな私を伊達政宗は意に介さず、私を抱えたまま入城する。周囲が信じられないものをみる目で見ていて、私はとても居心地が悪い。

「もう逃げませんから、おろしていただだけませんか」

廊下を進む伊達政宗に、私はめげずに願う。

だが、予想通りというか、伊達政宗は返事をまったくしてくれない。

どこかの部屋へどさりと下ろされた私は、小さな痛みに呻く。そっと下ろして欲しいとまでは言わないが、ひどいではないか。

「アンタの過去に何があったかなんて、俺は知らねえ。

だが、アンタが見てきた侍だけが真実かどうか、ここで見てろ」

伊達政宗は外を指す。

私とその隣に立つと、ごうと強い風が吹きつけてきた。

一瞬倒れそうになる私の肩を伊達政宗が支える。

そこから見える高い蒼天に、私は思わず息を飲んでいた。

蒼天だけならばよく見るけれど、そこに細く棚引く雲はひどく珍しい種類に見える。

吉兆とも凶兆とも、どちらにも取られそうな雲だ。

「そんなことを言って、結局私に戦の手伝いをさせるつもりではないのですか」

私の疑いを、伊達政宗は鼻で笑う。

「Ha！いらねえよ」

肩に置かれた温もりが離れたので振り返ると、伊達政宗は部屋を出るところだった。

部屋の前には片倉が眉間に皺を寄せて、立っている。

「この部屋は好きに使うといい。
足りないものは小十郎に言え」

そのまま伊達政宗が出ていった後、片倉が女中を連れて部屋に入ってくる。

目の細い面の二十代後半らしき女性と、大きな瞳で目元にほくろのある可愛らしい二十代前半ぐらいの女性は、共通して、落ち着いた優しい雰囲気を持っている。

「葉桜、この二人は梓と美津。
アンタがここにいる間、アンタの世話をする者だ」

歳若いほうが梓、目の細いほうが美津と名乗って、私に頭を下げた。

噂によるととても厳格な人物だと聞いていたのだけれど、片倉はなぜ私を受け入れているのだろうか。

怪訝そうな私に気づいた片倉が少し困った様子になる。

「アンタは、敵じゃねえ」

「……なんで言い切れるんですか」

「アンタの剣は真っ直ぐすぎる。」

謀なんかは苦手だろう？」

言い当てられて、私は両の眉を下げて、口端も下げてしまった。それを小さく片倉が吹き出す。

笑うと、強面の顔が少し和らいで、温かさが見える。

「くくっ、まあ、なんだ。

政宗様じゃねえが、俺もアンタを買ってんだ」

ゆっくりしていくといい、と言い置いて、片倉も部屋を出て行った。

残された私はため息を付き、それから女中を見る。

「あの、私のことは気にしないでいいから」

言いかけた私の手を梓が取る。

細くて柔らかいけれど、少し荒れた手は働いている女性の手だ。

「まずはお風呂ですね」

「は？」

聞き返す私に美津も頷く。

「お着物も変えましょうね。

ちようど昨日仕立て上がったきた藍染めがあるの」

「ええー、美津さんのじゃ地味だって。

私の藍華貸してあげる」

「梓さんでは派手すぎない？」

どうやら二人は私に着物を貸してくれるつもりらしいが、そこま

で世話になるわけには行かない。

「あの、私はこのままでも」

言った途端に二人が私を振り返る。

「「なりません」」

どんな反論も許さない様子の二人に、思わず私は頷いてしまった。それからはもう二人の手で綺麗に磨かれ、着つけられ。

ここに着いた時は昼頃だったというのに、全てが終わる頃には夕餉の時間となっていた。

美津に案内され、私は夕餉を食べるためにと部屋を移動させられる。

着ているのは結局美津の藍染で、藍一色ながら絞り染めで大輪の華が咲き誇る一品だ。

とてもじゃないが着こなせそうにないというのに、二人は似合うと世辞を言ってくれる。

観念して、部屋の襖を開くと伊達政宗と片倉、それから他に見たことのない二人が揃っていた。

まず気づいた伊達政宗が私を見て少し目を見開く。

片倉は難しい顔をしているが、黙って頷く。

すると私の後ろで襖の閉まる音が聞こえて、美津が下がったことを私に教えた。

後の二人は吟味するように私を見つめる。

そりゃあ、そうだろうなと納得するとともに、やはり今直ぐにでも逃げ出したくなる。

この城にいる限り、食事の時間は必ず伊達政宗と共にするように言われていると美津と梓に言われてしまった。

私としては、彼女たちとの食事のほうが気兼ねなくて助かるのだが。

ゆっくりと歩き、末席に腰をおろす。

「葉桜」

私を伊達政宗が呼び、片倉が手招きする。

来い、と言うことらしい。

そういえば、礼を言っていないと思い出し、私は彼らの正面に移動し、頭を深く下げた。

だが、私が何かを言う前に、伊達政宗が立って近づいてきて、私を抱き上げる。

「That's great!」

「わ!ちよつと……!」

「想像以上じゃねえか、小十郎」

そのまま上座へと移動され、隣に下ろされて、さすがに慌てた。隣に座った伊達政宗は平然と胡座をかく。

「あ、政宗様!あの!」

「こいつが葉桜だ。」

さっきも言った通り、この城に滞在させる」

聞いちゃいない。

本当に、まったく、出会ってから一度も、話を聞いてくれない。

私が拳を握り締めていると、片倉が小さく笑った。
睨みつけると、ごまかすように咳払いする。

「政宗様、葉桜は何か言うことがあるようですよ」

「礼ならいらねえぞ。」

……まあ、その体で払いたってんなら歓迎だな」

伊達政宗の手元が私の顎をくっつけて、合わせた視線が何故か
艶めいた様子になる。

4 #女中が付きました(後書き)

もうなんか行き当たりばったり。

(2011/07/24)

5 #片倉と握り飯

目に見えて、不機嫌になる私と視線を真っ直ぐに合わせて、伊達政宗は続けた。

「アンタのDanceは、戦場で見るにはもったいねえ」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

だが、理解した瞬間に殴ろうとした手は簡単に抑えられる。

……片倉に。

「政宗様、葉桜をからかうのはおやめください。
女の身ながら、かなりの手練です」

名前の知らない二人が急に刀に手をかける。

「なんでそんな女を梵に近づける、小十郎」

片倉がいなければ斬られていても不思議はない。

でも、私は動じなかった。

避ける自信があるわけでもないし、避けるつもりもない。

斬られても、侍なんてそんなものだど失望もしない。

「さっき、政宗様が言ったように、こいつは鏡だ。

もしこいつを斬れば、それはそのまま民の信頼を裏切ることと同じになる」

私が片倉を顧みると、彼はとても真剣で、それから伊達政宗を見ると得意げに笑っている。

「アンタたちは馬鹿なのか？」

私が斬られたぐらいで、いつきたちがそんなことを思うわけないじゃないか。

だって、私は――」

記憶の中のいつきや村人の目が私を恐れるものに変わり、私は項垂れた。

「私は、化け物なんだから」

小さな小さな呟きだけれど、部屋の中はひどく静かで、よく響いて。

「H a ! アンタのどこがM o n s t e r だ」

伊達政宗の否定を受け止めながらも、私は立ち上がり、部屋の出口へと向かう。

私の背中を片倉の声が追いかけてくる。
けれど、私はもう、ここにいたくなかった。

「葉桜」

「部屋に、戻ります」

無作法だが、部屋を出て後ろ手に襖を閉じる。

それから、来た道を辿って、与えられた部屋へと戻った。
部屋にはもう布団が敷かれていて、私は有難く寝転がる。

ふんわりとして、暖かなひだまりの匂いいっぱい
の布団は泣きたくなるほど優しくて。

仰向けに寝転がりながら、左腕を目の上に乗せて視界を遮る。

今まででもいつきたちのような者に手を貸したことはあった。でも、私の持つ力のことを知れば、必ず恐れられた。癒す力と戦う力、それから人の負を取り除く力。特に三つめの力が恐れられる要因であることは知っている。だから、この力だけは人に見せることはない。ないけれど、先の二つだけでも十分に特異なのだ。人は異質なるものを恐れる生き物だから。

「葉桜」

「いない」

襖越しに気遣うようにかけられる声に、反射的に不在を返す。だが、相手は静かに襖を開けて、ため息をついた。

「腹が減っているだろう。
握り飯を持ってきた」

腕を少しずらすと、片倉が小さく笑う。
その気遣う視線が、憐れむような視線が、心を締め付ける。

この人は何故一度剣を交わしただけで、こんなにも私を気にかけるのだろう。

「葉桜」

片倉がもう一度私の名前を呼び、布団の傍らに腰を下ろしたのがわかった。

これはもう食べるまで動かないつもりなのだと悟り、私はしぶしぶ腕を避けて、起き上がる。

それから睨みつけたが、まったく効果はなかったようだ。

「……噂じゃ、片倉様はもっと融通が効かない、伊達家大事の怖い人だったんだけど……」

差し出された握り飯はまだ暖かく、丁度良い塩気で美味しい。

中身は紫蘇梅で、ご飯が良く進んだ。

一つ目を食べ終わってから、二つ目に取り掛かり、これもまたあつという間に平らげる。

それから、片倉と残るひとつの握り飯を交互に見つめ、片倉がうなづくのを見て、これも平らげた。

こんなに腹いっぱい食べるのは久しぶりだ。

「そんなに腹が減っていたのなら」

「あの状況でどうして食べられるんですか」

片倉の言葉を遮りつつ、私は手についた米粒を口でなめとる。

それを見ていた片倉が手ぬぐいを差し出してきた。

行儀が悪いと言いたいのだろうか。

でも、この米はいつきたちが育てたものかもしれないし、一粒も無駄にするつもりはない。

全部を舐めとってから、有難く差し出された手ぬぐいで手を拭いて、口を拭う。

「ごちそうさまでした」

座りなおして、私が深く頭を下げると、片倉はいいと言って、私の頭を上げさせる。

困惑が片倉の瞳に映りこんでいる。

「片倉様は何故私にそれほど親切にしてくださるのですか？」

剣を交わしたからこそ、私が本気で貴方達に手を貸さないことなど承知でしょう。

政宗様が礼をしたいからと招いてくださったから一応いますけど、私はそれほどここに長居する気もないし、貴方達に懐柔されるつもりもありません。

それなのに、何故ですか？」

私の問いかけに、片倉は暫時考え込んだあとで、話しだした。

「政宗様はアンタに礼がしたいだけじゃない。

アンタに、自分の治める様を見て欲しいんだろう。」

アンタが今までどんな侍を見てきたかは知らないが、俺らは違う。そう、言わせたいんじゃないかと思う」

「何故、私に？」

さて、と片倉は笑った。

強面なのに、笑うと優しく見える不思議な男だ。

「何故かはわからないが、俺もアンタには違うと言わせてみたい」

そういつて、大きな手を私の頭に乗せ、そつと撫でた。

久しくされていなかったけれど、その心地良さに思わず目を細める。

数度撫でた手が離れてから、私がゆっくりと目を開けると、片倉はやっぱり優しい目で私を見つめていた。

何故、私なんかをそんな目で見るのだろう。

「それからな、あまり自分を化け物などというな。
アンタは人間だ」

唐突な言葉に、私は困惑しか返せない。

「少なくとも俺にはアンタが化け物には見えない」

「それは片倉様が私の力を知らないから……」

「アンタの癒しの力は、化け物なんて呼ばれるものじゃない」

違う、と言おうと思ったのに、言葉は出てこなかった。

忌み嫌われるあの力のことを言ってしまうばいいのに、どこかで
思いとどまってしまうのは、この人に嫌われたくないからと無意識
にブレーキをかけているのだろうか。

嫌われてもいいはずなのに、片倉も、伊達政宗も、私に取って大
嫌いな侍なのに。

「アンタはアンタの力に誇りを持て。

どんな力を持っているとしても、アンタは、葉桜は弱いもののた
めにしかその力を使わない。

自分で正しいと思うことにしか使わないのだろう。

だったら、自信を持て」

片倉の言葉は優しく、縋りたくなる。

何も言わない私の頭をもう一度撫でて、片倉は部屋を出て行った。

5 #片倉と握り飯（後書き）

引越前にギリギリ、きりのいいところまで書けた、かな？
小十郎に傾いてしまっているのは、趣味です！

（2011／07／24）

6 #いつきとの再会

一眠りした早朝、私は遠くの人の話し声で目を覚ました。

それは夜中に目を覚ました時に開け放したままだった窓から、風に乗って届いたもので、寝ぼけながらも聞き覚えのある声だったことだけ感じ取ったのだ。

ここで聞くはずのない、いつきの声。

（いつき？）

がばつと勢いよく起き上がり、慌てて窓辺へと寄る。

離れた場所に見える銀髪のツインテールは、きつと間違いなくいつきだろう。

急いで着替えて、いつきの見えた場所へと向かう。

だが、あと少しというところで、私は進めなくなった。

今更会ってどうするというのか。

嫌われたことを確認したくないから、こっそりと出て来たというのに。

「なあ、片倉様。

なして、葉桜はひとりで出てっちまったんだべ」

拗ねるようにいつきが問いかけている。

「不思議な力のことなら、気にせんでええのに。

村の皆も葉桜には感謝してもしきれねえって思ってるだよ。

なのに、どうして何も言わずに片倉様達といっちゃっただ？」

優しいいつきなら、そう言うと思った。

「さあな」

片倉はいつきには何も答えず、畑仕事をしているようだ。

しばらくして、手を止めた片倉が私のいる方を見る。

「本人に聞いて見ちゃどうだ」

そのまま片倉の近づいてくる気配に私は慌てて隠れる場所を探す。
でも、あいにくと適当なものがなにもないようだ。
もうダメだ、と思った私の前に片倉が現れる。

「お、オハヨウゴザイマス」

ぎこちない挨拶をする私を片倉はにこりともせずに見下ろす。
片倉から伸ばされた手を避け、私は後退り、首を振る。

「葉桜」

だが、宥めるように名前を呼ばれ、片倉のごつごつとした大きな
手に捕まってしまった。

「アンタを心配して来たんだ。
少しぐらい会ってやれ」

ふるふると首を振る私に片倉はため息をつく。

と、急に私の身体が地を離れた。

「な、片倉様!？」

荷物のように担がれ、そのままいつきの前に降ろされる。

私は顔を上げることができなくて、俯いたままで。

私の前にいつきの膝が見えたと思うと、私の目の前が暗くなり、肩と胸が苦しくなった。

いつきが私を抱きしめたからだと気づく。

「無事だっただな。

心配したべ、葉桜」

本気で心配するいつきの姿に戸惑う私は、どうすることも出来ずにされるがままで。

私を見つめるいつきの眼差しには嘘など欠片も見当たらない。

「いつきは、私が怖くないの？」

「なしてだ？」

葉桜はおら達を助けてくれたでねが。

何を怖がることがあるだ」

それから、いつきは村の人達が私にどんなに感謝しているかをとうとうと語って。

「葉桜さえよければ、また村で一緒にくらすべ。
おらもみんなも歓迎するべよ」

とてもとても魅力的なその誘いに、思わず頷きそうになる。
だけど、急に私の肩を強く抑える手があった。

「葉桜はここに滞在することが決まってるんだ、悪いな」

まったく悪びれる様子のない声を顧みる。

背後にいたのは伊達政宗で、いつきを真っ直ぐに睨みつけている。

いつきは私と伊達政宗を交互に見てから、心配そうに呟く。

「本当だべか、葉桜？」

少しためらい、視線を彷徨わせた私は、畑にいる片倉がこちらを見ていることに気がついた。

片倉を見ていると、なんだか居心地が悪くて、身じろぎして、伊達政宗の手から逃れる。

それから、ゆるくいつきに微笑む。

「うん、少しの間、ね。」

このお城にお世話になることになったの。

いつきと住むのも楽しかったけど、私がいると村の冬の食料をわけてもらうことになっちゃうし、やっぱり悪いと思って」

いつきは寂しそうな顔をしていたが、少し考えて、ふるふると首を振った。

揺れる銀髪がうさぎの耳みたいだな、なんてどうでもいいことを考えてしまったのは、無意識に泣きたくなるのを堪えたからかもしれない。

「……葉桜が決めたなら、仕方ないべ。」

でも、そんたらこと考えんでも、おらは葉桜をいつでも歓迎するからな。

だから」

言葉を切るいつきの瞳が、溢れる涙でゆがんでしまう。

「また、きてくれんべか」

私は何度も何度も頷くことしかできなくて、そんな私をいつきはぎゅっと抱きしめてくれて。

「政宗様、葉桜を苛めたら、承知しねえべ！」

まさか、為政者に食ってかかるいつきに、私は慌てて顔を上げた。涙は驚いて、引っ込んでしまった。

「ああ、promise、約束するぜ。」

葉桜はちゃんと面倒みてやるし、誰にも文句は言わせねえ」

いつきは私の視線に気づくと、とても温かくて優しい眼差しで微笑んでいて、伊達政宗との間にも険悪な雰囲気は一つもない。

「そんなに心配なら、Everyday、いつでも好きなきに城に来ればいい」

加えて、伊達政宗がそう言ったとたんに、いつきは満面の笑顔になった。

「おら、毎日葉桜に会いに来るべよ」

喜ぶいつきに、長くいるつもりのないことを言えなくなり、私はようやく伊達政宗の思わくに気づいた。

いつきが帰った後で、伊達政宗は意地悪く訊いてくる。

「で、いつ出ていくって？」

いつきにああ言ってしまった以上、すぐだというわけにもいかな
いだろう。

折角和解した彼らの関係を瓦解させるつもりなどないのだから。

それでも、素直に答えるのは悔しくて、私は伊達政宗から顔を背
けて答える。

「いつきを説得するまで、です」

「All right! 好きなだけいいばいい」

まるでそれは無理だとしても言いたげな伊達政宗の苦笑と言い様に、
ますます私は眉を寄せた。

6 #いつきとの再会（後書き）

引越のさなかにちまちま書いていたので、なんかバラバラ感が否めませんが、これでもいいか（おい。

（2011／07／28）

7 # 佐助という男

偶然視線の先にいた片倉が幼子を見るような温かい眼差しを向けていた。

確かに私の姿はいつきとそう変わらないが。

（これでも十八なんだけどな）

一度も口にしたことはないけれど、伊達政宗も片倉も私を見た目通りに扱っているのは明らかで。

なんだか複雑な気分になって、落ち込んでしまう。

思えば、一人でいるようになって成長したのは人ではない力ばかりで、体の方は忘れてしまったかのように成長していない。髪も、そういえば切っていないのに、伸びた覚えがない。

考え込んでいる私の身体が急にふわりと浮かび、なんだか覚えのある体勢になる。

そりゃあ、女らしく扱って欲しいとまでは思わないが、何故に荷物のように肩に抱えるのだろうか。

「政宗様、なんで私を抱えるんですか」

「Ah？ そりゃあこれから夕餉だからだ」

なんでだろう。

会話できている気がしない。

「そういうことじゃなくてですね、これでも年頃なんでこういう抱え方はやめてほしいといいますか」

後半はごによごによと口の中で小さく呟くだけになったので、きこえなかったのだろう。

聞き返されたが言い返す気力もなく、なんでもないですと私は締めくくった。

この話はここで終わったと思っていたのだが。

「は？」

「だから、アンタ、何か言いかけてただろ」

居心地の悪い中で食事を終え、急々と部屋に戻ろうとした私は伊達政宗に呼び止められて足を止めた。

あれから、この部屋に連れてこられたままの私は、すぐにでも部屋で一人になりたい気分だ。

「別に、政宗様が気に掛けるほどのことはありません」

「それはアンタが決めることじゃねえだろ。」

いいから、言ってみろ」

控えめに拒否を示したはずだが、通じていないらしい。

それとも、命令すれば何でも答えると思っているのだろうか。

私は奥州の者ではないし、従うつもりでここにいるわけでもない。どうしてもというから、滞在しているだけだというのに。

口元に小さく笑みを形作り、私は伊達政宗に微笑んでみせた。

「女の細かいことを気にしているようでは、先が知れますね」

未だ紹介もされていない、伊達政宗の傍に控える一人が気色ばみ、

刀を抜いて迫る。

地を蹴り、軽く距離を撮り直して交わした私は深々と彼らに頭を下げたのだった。

「御前失礼いたします」

そんなことがあってから数日して、城内が急に静かになった。梓に尋ねるとどこかに戦に行ったということらしい。

ただの客人である私には一言もそんな話はされていないし、それは当たり前のことなのだが。

（本当に私を利用するつもりがないのか）

安堵してしかるべきことなのに、なぜか残念に思ってしまう。

ひとりでいることには慣れていたはずなのに、彼らがいない城の中はやけに静かで落ち着かなくて。

城内で見つけた道場で、ひとり舞扇を広げては躊躇い、結局何もしない無為な日を過ごしてしまった。

何日も、何日も、彼らは戻らなくて。

ある日その人が現れた。

「アンタが葉桜かい？」

太陽みたいに明るい髪を逆立てた、迷彩服の男は、道場にいる私の前に唐突に現れて、不躰に訊いてきた。

私が何も答えずにいると、一枚の書状を渡した。

差出人は、片倉小十郎景綱。

ざっと眼を通し、顔を上げた私に男は問う。

「右目の旦那にはアンタの好きにさせるように言われてるけど、どうする？」

書状には伊達政宗が意識不明の重傷であることが書かれていて、まだしばらくの間は城に戻れない旨が書かれているばかりで、私に合力を願うような言葉はひとつもなかった。

まだ私は伊達政宗達を始めとした侍を信用したわけじゃない。でも、数日ここで世話になって、彼らが今まで見てきた者たちとは違うと思い始めていたのは確かだ。

「政宗様はそこまで重傷なんですか？」

私が問うと男は真摯に私の目を見つめ、手を差し出してきた。

「双竜のところに行くかい？」

「双竜？」

私が聞き返すと伊達政宗と片倉のことだと男は言う。

これは、罠だろうか。

だが、この男が持っていた片倉の書状は本物だ。

私は悩んだ末に、男に問いかけた。

「彼らは今どこにいて、貴方は何者なんですか？
私は貴方を信用していいんですか？」

男は少し意外そうにした後で、人好きのする笑顔を浮かべる。

「俺様は甲斐は武田、真田忍隊の佐助だ。
伊達軍は今うちにいる」

信じるかどうかは任せると言われた私は、すぐに荷物をまとめた。
そして、梓と美津にいつきへの伝言を残して、すぐに発ったのだ
った。

「政宗様をよろしく願います」

私の力の事も行き先も知らないはずの二人はそう言って、私を送
り出した。

城を出て、すぐに男が近寄ってきた。

あの佐助というやつだ。

「あれ、行くんだ？」

無視して向かう方向は確かに甲斐は武田の領土なのだけど。

「一言頼んでくれれば、俺様連れてってあげるけど」

ひたすら佐助を無視し続けて、歩き続ける私は迷いなく山に分け
入る。

そこにきて、急に佐助は私の肩を掴んで止めた。

「アンタさあ、いいかげんに意地はるのやめたら。
独眼竜の旦那が心配なんだろう？」

私は佐助を強く睨みつけ、肩を押さえる手を外させる。

「心配なんて、しない。」

私は彼らに恩があるから、それを返すだけよ」

何かを言い返そうとした佐助は一度口をつぐみ、ため息をついた。

「だったら尚更俺様に言えばいいじゃないの。」

あんたの足じゃ間に合わないんだから」

私が反論するより早く、佐助の肩に担ぎ上げられる。

「何をするの！」

「はいはい。」

とりあえず、口を閉じててね」

揶揄でなく、景色が飛ぶように過ぎ、森の中を泳ぐように移動された。

その間、私はひとことも話さず、佐助の軽口だけが続けられ。

なぜか真田幸村とかいう男の愚痴を延々ときかされた。

これはどういった嫌がらせだろう。

7 #佐助という男（後書き）

勢いって怖い。

なんでか武田に赴くことになりました。

イメージはあれです、アニメで政宗様が銃弾に倒れたやつ。
でも、ストーリーは別です。

適当です（おい

しかし、武田かぁ。

……ますますニセモノ満載に……orz

（2011／07／29）

8 # さよならの後で

その場所に着いて直ぐ、私はその人のもとに通された。

出会った頃の生命力に溢れた様子はなく、青白い顔で眠っている伊達政宗は死んでいるようだった。

布団の傍らにいた片倉が私に気が付き、深く頭を下げる。

「葉桜、アンタが侍を嫌っていることは承知している。

それでも、どうか今だけは政宗様に力を貸しちゃくれねえか」

この片倉が容易に頭を下げるような男でないことは知っているし、伊達政宗に心底惚れ込んでいることも知っている。

でも、私が嫌いな侍で、今までなら死んでも嫌だつつっぱねるところだ。

米沢城での暮らしを思い返し、人として暮らせた僅かな日々を想う。

米沢城の人達はとても優しいし、毎日来てくれるいつきと話すのも楽しかった。

それも殆どの者が私の力を知らないが故に、ということもわかっている。

ここで舞うということは、そういう日々を失うことでもあるが、きつとここで舞わずとも断れば同じこと。

「片倉様もお怪我をなさっておられますか」

「俺の怪我などどうでもいい」

やってくれるのか、どうなのかと問われ、私は少し悲しくなった。もうこれで、さよならになるのに。

「侍は嫌いだけど」

舞扇を取り出し、立ち上がる。

そのまま片倉と伊達政宗から距離を取り、ひたりと構える。

「片倉様たちのことは嫌いじゃありませんでしたよ」

片倉に何かを言われる前に、私はぎゅっと目を閉じ、舞始める。
部屋全体の空気を掴みとり、ゆるりと舞に巻き込んで、ありとあらゆるモノを正常な方向へと導いてゆくように。

癒しの舞は人の潜在する治癒の力を一時的に高めるものなのだ。
正常な方向へと導くということは、そういうことと同じ意味を持つ。
っ。

単に癒すのでは生温いと思わせるほど、伊達政宗の容態は良くない。
い。

指の先から爪の先まで、すべての力を行き渡らせて、世界の力を導いてゆく。

それは長い長い間、私と同じ力を持つ者たちの間で伝えてきた、
浄化の舞でもある。

「……っ」

呻くような声が聞こえたが、そのまま舞い続け、何も考えずに力を紡いでいて。

このままこの身が消えてしまえば、どんなにか楽だっただろう。

「葉桜」

私を呼ぶ片倉の声がする。

ああ、なんて、優しい声なんだろう。

最初はそんなこと全然思わなかったのに。

「……もういい、葉桜」

正面から私の手を取って止めたのが、さきほどまで意識のなかった伊達政宗であることに、私は驚かない。

しかし、伊達政宗は動けるほどになったというのに、何故か辛そうな顔で私を見ている。

私がふわりと微笑むと、伊達政宗は私の頭を自分の体に押し付けて、私の息が詰まるほど強く抱きしめる。

「Sorry、アンタにその力を使わせるつもりで城に置いてたわけじゃねえんだ」

「はい」

わかっている。

そのつもりがなくても、この時勢であればこんなことがいつか起こることだって、わかっていたはずなのだ。

そして、舞えば終わりと伊達政宗も片倉も私も分かっていたはずなのだ。

「これでEndじゃねえよな？」

「奇跡は二度起こりませんよ、政宗様」

抱きしめる手がゆるみ、私は腕の中から伊達政宗の顔を見上げる。

「行くな」

命令ではなく、願いの言葉が伊達政宗の口から発せられて、笑おうとした私は失敗した。

目の前の伊達政宗の顔がかすかに歪んでいるということは、私の目が潤んでいるに違いない。

「城での日々は、とても楽しかったです。

自分が化け物だということを忘れてしまいそうになるほど、とても」

私の頬を撫でる伊達政宗の手が止まり、せつかく元気になったというのに苦しそうに顔を曇らせている。

「アンタはM o n s t e rじゃねえって言っただろ」

伊達政宗との平行線なこの会話もこれで終わりだ。

意識して伊達政宗から離れ、私は両手を前で重ねて、深く頭を下げる。

「ありがとうございました」

目の前にいる伊達政宗は私に手を伸ばそうとしたが、何かを堪えるように止め、その手を強く握りこむ。

それを見て、私の心は残念な気持ちと安堵の両方の気持ちに揺れていた。

もともと私はどこかに定住することも、合力することもしない
決めていた。

侍が嫌いだからという個人的な理由ではなく、自分の持つ力が各
国の均衡を崩す可能性があるからだ。

なかなか死ねない兵士を作ることだって、不可能ではない。

だから、別れがいつか来ることが決まっていたからこそ、誰に情
を移してもいけなかったのに。

「葉桜、どうしても行くのか」

背中に片倉の声がかかったら、足が止まっていた。
進まなきゃいけないのに、何故私は奥州に、彼らの元に留まりた
くなってしまったのだろう。

「私のように怪しい素性どころか妖術まで使うような者を政宗様の
そばに置くんなんて、片倉様らしくないですよ。」

私が政宗様を亡き者にしたら、後悔するのは片倉様なのですから、
これからはもっと気をつけて差し上げてください」

私は口にしながら、今にも泣いてしまいそうで、でもさよならを
言う私が二人の前で泣くのは卑怯すぎるから。

涙が零れ落ちる前に、目を閉じたままで部屋を出た。

二人の目の届かないところで、自然と壁に寄りかかり、息を吐く。
なんだか疲れた。

これからどうしようか。

やはり南に行くべきだろうか。

そんなことを思い悩む私の脳裏にいつきの笑顔が過る。

（いつきは、黙って行ったら怒るよね）

でも、いつきにはさよならを言いたくない。

初めて出来た友人を、失いたくない。

でも、もう奥州には帰れない。

そこまで考えて、私はやっと気がついた。

（帰る、じゃないよ、もう）

どうやらもう手遅れらしいと気がついたのは、さよならの後で。

ますます帰れないな、と私の口から乾いた笑いが零れたのだった。

8 #さよならの後で（後書き）

ひとまず、奥州とさよならです。

いろいろと細かいフラグは立てましたが、どう動いたものか。ここまできてお館様に遭わないなんてのはないですよー。

（2011／8／1）

9 #止まらない涙

「お主が葉桜じゃな？」

ぼーっとしているところに声をかけられ、私は自分に声をかけた人物にゆっくりと目を向けた。

夕日のようなような朱に彩られた甲冑姿の男だ。

五十代ぐらいだろうか。

老成した皺の中で、慈愛に満ちた瞳が覗く。

「都桜はまだ息災か？」

それは里のものしか知らないはずの隠語で、俄に私は警戒を強める。

「貴方は、何者ですか？」

空気を張り詰め、構える私の背後で、部屋から出てきた双竜が驚きの眼差しを私たちに向けているのを感じる。

確かに今政宗と片倉を癒しはしたが、それは侍すべてを許すということではないのだ。

「私を懐柔しようというのなら無駄なことです。

私は、仇である侍達を、一生許すつもりはないのですから」

だからといって、敵対するつもりもない。

私は私を生かしてくれた里の全てのものと共にあるのだから、容易に死ぬわけにはいかないのだ。

舞扇を逆手に構える私と老人の間に、佐助と、短髪に赤く長い鉢巻をしめ、赤いジャケットを素肌羽織った男が入る。

私の後ろではまだ状況が飲み込めていない伊達政宗と片倉の戸惑いを感じる。

「下がれ、幸村」

「しかし、お館様っ」

「葉桜、里が襲われたというのは真か」

真摯な老人の様子から、ここにいる者たちに関わりがないことは知れる。

でも、侍を許せない想いだけでここまで生きてきた私には、どうしても感情を制御できない。

自分が侍に敵うとは思っていないから、仇を討つつもりはないけれど、剛力することだけは絶対にしないと誓ったのだ。

「……私が子供の頃に侍に襲われ、姉様と私だけが落ち延びました。その姉様も三年ほど前に亡くなりました」

思い出すだけで左の目元から雫がこぼれ落ちてしまう。

姉が若くして死んだのは、私自身のせいでもあるのだ。

もっと早く役目を譲っていれば、姉は今だ健在であったかもしれない。

「貴方達が里を襲ったのではないことはわかります。

でも、全ての侍は私の仇であり、だからこそ、私は貴方達の下らない争いに手を貸す気はない」

誰かが私の名を呼んでいる。
優しく、穏やかに宥める声。

頼りたくなる声、だ。

頭を振って、弱い心を振り払う。

「侍なんて、皆、戦で死んじゃえばいいのよ！
私たちのことなんて、放っておいてよっ！」

誰かが私を後ろから引き寄せ、強く頬を張った。

初めてではないけど、久しぶりに手を挙げられた気がする。
目の前にいるのは、片倉、か。

「落ち着け、葉桜。」

俺達が敵じゃねえってわかってるなら、落ち着け。
誰もアンタを利用しようなんて、考えやしねえ」

張ったその手で私の頬をなで、真剣な顔で私を見下ろす。
片倉の顔が歪む。

「っ、そ、あ……っうう……っ」

何かを言おうとしても、しゃっくりがこみ上げてきて、言葉にならない。

掴まれていた腕が離されても、動けない。

「うあ……んん……っ」

泣き声をあげてしまいそうなのを唇を噛んで堪え、片倉を睨みつけようとしたけれど、うまくいかない。

だって、止めてくれてよかったって、私は思ってしまった。

「つく……っ、ふえ……っく」

泣いている私を取り囲んでいる彼らが戸惑っているのがわかる。誰も私に手を出すことも声を掛けることでもなくて、ただただ見ているだけしかできなくて。

しばらくして伊達政宗が焦ったように私を引き寄せた。その頃には周りに残っているのが伊達政宗と片倉だけしかいないくて。

「葉桜」

でも、その優しい声音を振り払い、私はその場に座り込む。姉が死んだ時にだってこれほど泣かなかった。簾が外れたように泣き続けて、泣き続けて、泣き続けて。

「俺が悪かった。」

だから、泣きやめ、葉桜」

途方に暮れた様子で私の前にしゃがみこんだ片倉が優しく私の頭を撫でてくれて、泣き腫らした目でそれを見ながら、私はなんとか涙を止めようとした。

でも、止められなかった。

「ごめ……ごめ、なさ……っ、止ま、ない……っ」

私の頭を自分の肩に押し付けようとする片倉に、両手を突っ張って拒絶する。

これ以上寄りかかると、本気で私は引き返せない気がする。

しばらくして、急に私の身体は抱き上げられた。目の前にある伊達政宗の顔はひどく焦っていて。

「いいかげんに泣き止まねえと」

「政宗様」

何かを言おうとする伊達政宗を片倉が止めて、二人がにらみ合っ
てしまう。

泣きやめない私は、伊達政宗の腕から抜け出すこともできなくて。

でも、私の涙は唐突に止まった。

西から聞こえた爆音に一瞬身体を震わせ、すぐに耳をそばだてる
私を怪訝そうに見てから、二人も同じ方向を見やる。

「伊達殿、片倉殿」

そこに現れたのはあの赤い鉢巻の男で、私を見て少しだけ安堵の
表情を浮かべたようだ。

「今しがた西のほうから妙な物音が聞こえたようだが」

伊達政宗が問うと、赤い鉢巻の男はうなづく。

「それなら配下の忍び隊が確かめに向かっている頃合いにござる」

私が赤い鉢巻の男に目を向けると、一瞬だけ目があつたものの、
すぐに逸らされてしまった。

心なしか、耳が赤いようだ。

「葉桜殿は、その……」

複数の視線を感じたが、私は気にせず先程の方角に目を向け。

ついと伊達政宗の襟元を引いて、下ろしてくれるように頼む。
地に足を着いて直ぐ、私は赤い鉢巻の男に深く頭を下げた。

「先程は取り乱してしまい、失礼いたしました」

「あ、いや、某は……」

何かを言いかけた赤い鉢巻の男は、私が頭をあげると、何故かわたたと戸惑う素振りを見せる。

だが、じっと見つめていると次第に落ち着いていったようだ。

「某は真田源次郎幸村と申す者でござる」

名を言われて、ぽんと納得できたのは、此処に来るまでに佐助から散々聞かされた愚痴のせいだろう。

「ああ、あの」

三人に聞き返され、苦笑いで誤魔化す。
笑うと少し顔が痛い。

9 #止まらない涙（後書き）

はい、奥州に逃げました。

だって、口調がわからない。

お館様とか幸村とか難しすぎるわあああ！

ただでさえ双竜も無理なのに。

そして、さらに難しい人物のところに行くとか、私馬鹿だよね（泣）

（2011／08／02）

10# やつと見つけた仇

「旦那！」

そんな私たちのところに佐助が誰かを抱えて戻ってきた。
ぐったりとしたその人は伊達軍の者であるようだ。

「見るな」

だが、それ以上は伊達政宗の腕の中に抱き込まれてしまっていてわからなくて。

私にはその人がひどい火傷を負っていることだけが、その匂いでわかった。

さっきの爆発に関係あるのだろう。

「佐助、その者は」

真田幸村が問う前に片倉が駆け寄っていったのがわかったが、それでも伊達政宗は私を開放してくれなかった。

「離してください」

「No、だ。」

アンタは見なくていい」

片倉と佐助の会話が聞こえて、そしてそれが聞こえた瞬間、私はあることを確信した。

「さらった者たちと引き換えに、武田の楯無しの鎧、伊達の竜の刀、護国の舞姫をそろえて差し出せと申しております。」

しかも刻限は明朝」

護国の舞姫というのは、それほど知られている名じゃない。
現に、ここにいる誰もが気がついていない。」

「松永弾正久秀」

署名に目を留めた片倉は書状を握りしめた。
その名を私は、伊達政宗の腕の中で繰り返す。

「松永っていやあ、戦国の梟雄といわれながら、天下取りに名乗りを上げず、今は庵にこもって骨董品集めに精を出してるっていう」

稀なるものを求める者だからか、と熱くなる心とは裏腹に、頭の芯がずっと冷めてゆくを感じる。

「真田、楯無しの鎧とは何だ」

「武田の家宝にござる。」

大事を為さんといたとき、お館様はその鎧と御旗の前に重臣たちを集め、武田の総意を決される。

そこで立てられた誓いは決してくつがえることはない。

あの鎧は我らの揺るぎなき意思を支えるよすが、文字通りの宝にござる。

いかなる武具をもってしても貫くことはできぬ鎧といわれておるゆえ、転じて深手を負った者の治癒を願うとき、鎧の間に床をのべることがあり申す。

ゆえに此度は伊達殿を」

「あれがそうか」

だが、と続けられる問いに私は伊達政宗の腕から無理矢理に離れ

て答えた。

「護国の舞姫とは、私のことです。

私の一族の持つ力はかつてそう呼ばれ、この国の穢れを癒してきたのです」

舞姫、と誰かが呟き、私はふわりと自然に微笑む。

「松永久秀、やっと見つけた。

……姉様たちの、仇」

私が襲撃から助かったのは、先代の姉様が私を連れだしていたからだ。

もつとも若かった私だけでも助けようと、里全体が私を助けるために犠牲となった。

その頃の舞姫だった里長は姉様に急ぎ継承の舞を伝え、襲撃の後行方知れずとなってしまった。

あの時の爆発、業火に包まれる里を私は小さいながらに覚えていた。

十になったばかりの頃の話だ。

「伊達の刀と武田の鎧を庵の床の間にも飾って、葉桜の舞でもみようって腹か」

仇を討てるなんて思っていないけど、それでも、許すわけにはいかない。

もしも里長が生きているのだとすれば、助けださなければ。

歩き出そうとする私の腕を片倉が押しとどめる。

「おい、落ち着け、葉桜」

「私は落ち着いてます。」

手を離してください、片倉様」

「アンタ一人で行って何が出来る」

何かが出来るとは考えてない。
でも。

「ねえ、片倉様」

真っ直ぐに見つめて、微笑む私を片倉は厳しい目で見つめている。

「猫だって油断すれば鼠に噛まれるんですよ」

一太刀でいい。

それだけでもしてやらなかったら、誰が姉様たちの恨みを晴らす
というのだ。

「真田幸村、オレの馬はどこだ」

その時、私の隣に伊達政宗が並んだ。

「政宗様！」

「Not to worry」

諫める片倉に心配するなど声をかけながら、伊達政宗は私に笑いかける。

「人質にとられた連中は取り戻せばいいだけの話だろ。」

俺が行って助け出す。

アンタのことも、俺が護る。

その松永って野郎はどこにいる」

「なりませぬ！」

歩いている伊達政宗の足元は、まだそれほど力あるものじゃない。
完治させたわけじゃないのだ。

ただ治癒力を高めてあるだけで、完全に治るにはもう一日か二日はかかる。

「伊達軍は誰ひとり欠けちゃならねえ。

You see？」

「お二人とも、行かせるわけには参りませぬ！」

私たちの前に立ちはだかる片倉の左手が、刀の柄にかかっている。

「小十郎、俺に刀を向ける気か」

「家臣は大事。」

しかしながら一番の大事は政宗様の御身」

「だったらついて来い。」

いつものように俺の背中を守れ」

刀を抜く片倉と対峙する伊達政宗から、私は静かに距離を取る。

その背が誰かに当たり、その誰かが私に囁く。

「黙ってみてな、嬢ちゃん」

佐助だ。

いつの間に私の背後に立ったのだろう。

「何も恐れず、いつ如何なるときもただ前だけを見て進んでいく。」

そして、その背中はこの小十郎がお守りする。

そう誓っておりますが。

今、手負いのあなた様を出陣させることだけは、この命に代えても！」

刀を下段に構えた片倉の目は間違いなく本気だった。

「仕方ねえなあ」

同じく刀を抜いた伊達政宗の視線が鋭くなる。

「遠慮はしねえぜ、小十郎！」

二人の刀がぶつかり、火花が散る。

それを見つめる私が動けなかったのは、何も佐助に抑えられているからというだけではない。

私自身も二人を癒すための舞をしてから、それほど余裕があるわけではないのだ。

すべては侍に借りを作りたくないためで、少しでも早くひとりになり、回復したいから、出て行こうとしているのだ。

「離して、佐助」

「んーん、だめだよ、嬢ちゃん。」

そんな身体で無理して、野宿とかされちゃ、連れてきた俺様が片倉の旦那に殺される」

佐助の両腕が私の腰に周り、しっかりと抱きしめられる。

「護国の舞姫の話は俺様も聞いてるよ。
そういうことなら、ますます行かせられない」

え、と首だけで振り返る私の目の前には佐助の真摯な視線がある。

「舞姫は中立、いかなる忍びも忍ぶ事なかれってのが通例なんだけ
どさ、昨今はそれが崩れてるわけ。

里が消えたから知る者は減ってるけど、それでも生き残りがいる
と知れば狙われるよ」

どこにとは言われなかったが、それが各国の抱える忍びの里を指
すことは明らかだった。

里でもよく忍ぶ者から日用品を仕入れたりもしていた。
代わりにやるのは気休めのような加護の守り札だった。

「助けてくれても、私は札の書き方を知らないのだけど」

「あー、俺様信じてないからいいの。」

それより、お館様からくれぐれも怪我させないように言われてる
んだよね」

そういうわけで、と首筋に後ろから手刀を浴びせられ、暗くなる
視界の端で伊達政宗が倒れるのが見える。

「おやすみ、葉桜」

悪態をつこうとしたけど、それは叶わなかった。

10#やっと見つけた仇（後書き）

うん、あのさ、あれです。

アニメのあの小十郎さんが戦うシーンでカッコイイよね！

つまり、完全なる趣味でこの回書いてます。

その割に戦闘シーン書いてないっていうね。

（だって、ヒロインが見ちゃいない）

（2011／08／02）

11#松永という男

目を覚ました私は知らない天井を見つめた。

それから起き出して、障子を開く。

外はまだ暗いが、眠らされてから、どのぐらい時間が経ったのだろう。

「四半時前に幸村が竜の右目を追って出たばかりじゃ」

振り返ると、部屋の中に人影があり、手酌で酒を飲んでいるようだ。

その声に、私は覚えがあった。

「確か、お館様と呼ばれておられた……？」

「ワシは武田信玄じゃ。」

他の者はお館様などと呼ぶが、葉桜は好きに呼ぶがいい」

空気に溶け込むようでいて、強い存在感を示す武田信玄に私は自然と膝をつく。

「信玄様」

「……ミヤと同じか」

それが代々の舞手の愛称であるのを私は先代から聞いていた。

里の外で舞手は氣に入った者にだけ、ミヤと呼ばせたのだ。

つまり、この者はそれだけ里の舞手に近く、信頼されていたことになる。

私の空気が和らいだのに気づいた信玄が笑う。

「お主はミヤではないのか？」

「はい」

信玄はそうかと頷き、また手酌を傾ける。

私はそれを見ながら、少し迷っていた。

片倉たちを追いかけるべきかどうか、信玄から何の話を聞くべきか。

そして、里のどこまでを話すべきか。

「馬を、西の門に繋ぎ忘れたのじゃ。」

誰か気づいて、厩に戻してくれるといいんじゃないが」

暫し躊躇したものの、私は信玄に頭を下げて、部屋を後にした。

西の門に近づくと、馬は確かにいたが。

「late、遅かったじゃねえか」

甲冑を身につけた伊達政宗が既に騎乗している。

大太刀一本しか差していない腰の辺りが、いささか寂しい。

「政宗様？」

「さっさと行くぞ。」

Partyが終わっちゃう」

馬を操り近づいてきた伊達政宗が私に手を差し出す。

片倉が守ろうとした男を連れて行っているものだろうか、という葛藤が私を躊躇させる。

だが、伊達政宗はひとつ舌打ちすると、無理矢理に私の腕を掴んで、馬上に引き上げた。

最初に出会ったときのような荷物のような扱いでなく、姫君のように自分の前に座らせて、驚いている私を優しい笑顔で見下ろしてから馬を駆けさせた。

力強く腰に回された腕には、すでに違和感がない。

でも、自分の力がそこまで早く怪我を治せるものだとは思っていない。

こんな風に馬に乗って駆けては、傷口が開くのではないだろうか。

「葉桜、松永って野郎がアンタの仇なのか？」

「たぶん、そう。」

里が爆破されたのを覚えてるもの」

「俺が……を……たら、アンタ……は……るのか？」

馬上で話しながらだと、馬の蹄の音や風の音で、ところどころ伊達政宗の声が聞こえない。

普段なら声を張り上げているくせに、なんで今はそんなに小さな声で話しているのか。

「何？」

「Shit! なんでもねえよ！」

しかも聞き返したら、キレた。

なんなのだ、一体。

大仏殿の跡地に辿り着いた私たちは、急いでそこを駆け抜けた。そのまま長い階段を登り、あと少しで大仏殿にたどり着くという

ところで、目の前で赤い爆風が広がり、私は吹き飛ばされる。
伊達政宗が抱きとめてくれなければ、下まで転がり落ちていたかもしれない。

「Are you OK?」

「ありがとう」

伊達政宗の腕から飛び降り、もう一度私は階段を駆け上がる。

そこは一面火の海で、先に来ているはずの片倉や真田幸村の姿はなく、見たことのない壮年の男だけが立っていた。

男は私を見て、その目を輝かせる。

「竜のもとに舞姫がいるとはきいていたが、本当に来るとは。

迎えに行く手間が省けたようだ」

今の私が舞扇を構えていなくてもそれとわかる理由はわからないが、状況からするとたぶんこの男が松永だろう。

「アンタが松永久秀というなら、聞きたいことがある。

何故、里を襲ったの」

くくくつと楽しげに男は笑う。

「稀なる舞手の舞が見たいと思うのは、当然ではないかね」

そのセリフが確定だった。

懷から舞扇を取り出し、臨戦態勢に入る私を、伊達政宗が押しのける。

「アンタが松永か。」

うちのもんが世話になったらしいな」

炎の中から、多少の怪我をしているが元気な片倉と真田幸村の姿が見えて、私は少しほっとする。

そういえば、伊達軍で人質になっている人がいたんだった。

その人達とは見回しても姿は見えない。

この爆発で吹き飛ばされていなければいいのだが。

「……政宗様、無茶は駄目ですからね」

私は援護に切り替えるために舞扇を軽く離し、パシッと持ち替える。

元々姉様たちの仇討ができると思っているわけじゃないし、今回は伊達軍の者の救出が優先だということぐらいはわかっている。

私はただ一太刀が浴びせられればそれでいいのだ。

ふわり、と私が舞い踊るは変わらず浄化の舞。

正常な流れを作り出すこの舞は、人の過ぎた欲のようなものを集めることこそが本当の働きであるはずだが、松永からはあまり引き出せていない。

私はそれに自分の身のうちにある力を練りこみ、伊達政宗と片倉、ついでに真田幸村に注ぎこむ。

これで多少なりと力に慣れればいいが、影響は殆ど無いだろう。多少、怪我をしにくくなるぐらいか。

「いいねいいねえ、ゾクゾクするぜえ！」

「うおおおお……みなぎるうあああ！」

うん、どっちもアレな感じだけど効果は少しあったようだ。

「今度は本物の舞姫のようだね。
そうでなくては座興にもならない」

松永が指を鳴らす瞬間、私は伊達政宗に抱き上げられ、放り投げられていた。

直後に爆発が起こり、私と伊達政宗のいた辺りが抉り取られたが、伊達政宗も上手く躲したようだ。

私は投げられた先で、佐助にしっかりと抱きとめられる。

「私は毬じゃない」

「助けてもらったんだから、文句言わないの」

軽い動作で地面に下ろされた私が愚痴ると、佐助は宥めるように返してくる。

その実、宥める気がないのは目を見ればわかる。

11#松永という男(後書き)

悩んだ末に、やっぱりでかけました。

政宗様はなんか勝手についてきた(え

自分でもヒロインがどこに転ぶかわからない↑

(2011/08/04)

12# 仇討ち

「独眼竜の旦那、あんなに動いて大丈夫なの？」

「だいぶ良いみたい。」

私も寝て回復したし、少しなら援護できるわよ」

「そりゃいい」

佐助と話している間にも戦闘は始まっている。

伊達政宗と片倉が攻撃しているが、松永はいなすばかりだ。

松永は強いと聞いていたが、本当に強い。

私はあの二人を同時に相手どるなんてごめんだ。

まあ、伊達政宗だって、完治している状況じゃないからだろうけど、片倉の動きにキレがなさすぎる。

途中に倒れている者が三人いたが、片倉ひとりでやったのだとしたら。

「片倉様、怪我でもしてるの？」

私が問いかけると、佐助は思い出したとばかりに、炸裂弾を片倉の側に投げつけた。

「右目の旦那！毒消しの炸裂弾だ。
深く息を吸え」

言われたとおりに片倉が深呼吸する様子を見て、私はまた舞扇を構える。

「どのぐらいで効くの？」

「すぐだよ、すぐ」

それより、と耳元近くで佐助が囁く。

「近くに伊達の人質が三人いるんだけど、どこにいるかわかる？」

「そういう力じゃないから、わからない」

残念、と残念そうな様子は微塵もなく呟く佐助に少しムツとしながら、舞扇を構える。

「見つけれなくても、生きているなら回復できるわよ」

「敵方が回復することは？」

「そんなへましない」

手を翻し、細く細く、力を紡ぎ、返す扇から放射状に放つ。

力の糸は常人には見えない。

そこにかかる生者の気配を辿る糸から視て、選別する。

細かな力の操作ではあるが、できないわけじゃない。

ついではかりに、佐助にも力を流す。

それに気づいた佐助が自分の身体を見まわし、にやりと笑う。

「ふうん、こりゃイイねえ」

佐助は急に私の腰を抱きかかえると、軽く飛んで移動し、黒く焼け焦げた爆発跡に下ろした。

私たちのいた辺りは戦闘の邪魔になるから、移動したというところだろう。

遠目に動きの良くなった片倉が押しているのが見える。

と、なぜか押されているはずの松永と目が合った。
ぞくり、と身体中の毛が逆立つ程の寒気に襲われる。

「まだ、何かあるかも」

言った瞬間、私に向かって炎が伸びてきた。

迫ってくる炎が私の頬を撫でる前に、私を逃がしてくれたのは佐助だ。

まだ抱えられたままだったから、そのまま逃げてくれたのだ。

「佐助！」

「双竜とやりあいながらこっちまで狙うなんてやるなあ」

岩陰に私を隠し、佐助が消える。

その瞬間、私の周囲に炎の檻が現れた。

熱さが肌を舐めて、チリチリと髪焦げる嫌な匂いがある。

「葉桜！」

誰かが自分を呼ぶ声を聞きながら、私は冷静に舞扇を構えた。

深く息を吸うと喉が焼ける。

手を伸ばせば、炎に触れる。

でも、私は、死ねない。

空を竜のように稲妻が走り、地に落ちるのが見える中、私は静かに舞い始めた。

普通なら焼死してしまうそれでも、今の私には死ぬことができない。
い。

舞姫とは、ひとつの呪いなのだと、姉様は言っていた。

次に繋げなければ、死ぬことのできない呪いだ。

「心配しないで」

手を伸ばしてくれる誰かに言って、私は笑う。

「私は化け物なんだって、言ったでしょう？」

ふわりと飛んで、広げた舞扇を地面に勢いよく叩きつける。

それを中心に小さな竜巻のようなものが起こり、周囲の火は消えた。

多少チリチリと肌は痛いし、呼吸するだけで苦しい。
でも、私は生きてる。

座り込んで、うつむいたままの私はなんとか顔を上げて、周囲を見定める。

ぐるり見回し、松永を認めると不敵に笑う。

「本物の、舞姫に間違いないようだな」

「そうよ。」

ちゃんと来たんだから、他の人達は無事に返して」

立ち上がろうとするが、身体に力が入らない。

こうして座っているだけでやっただ。

「そんな約束をした覚えはないがね」

一步を踏み出す松永で、私の前に真田幸村が立つ。

「か弱い女性にかくも熾烈な攻撃をするとは、この真田源次郎幸村、到底許せぬ所業でござる」

「うわ、旦那がまともなこと言ってる」

佐助のツツコミで、全部台無しだ。

言いながら、佐助も私のすぐそばで気構えていてくれる。

恐らく武田信玄に私を護るように命じられているからだろう。

「よそ見してんじゃねえ！」

伊達政宗が斬りかかり、片倉もそれを援護する。

二人は何のために松永と戦っているのだろう。

仲間のため、弔いのためというのなら。

「……やめて」

人質の三人は生きている。

それをさっきの舞で確信した。

死者に私の力は届かない。

この身が導く力の先には確かに生者がいた。

だから、恨みや復讐なんてもののために、伊達政宗や片倉が手を汚すことはないのだ。

そんなものに囚われるのは私だけでいい。

伊達政宗にはいつきとした約束があるのだから、こんなことに囚われてはいけない。

重い体を無理矢理に持ち上げ、震える腕をさし上げて、舞扇を構える。

「嬢ちゃん!？」

「葉桜殿っ」

自分の荒い呼吸をゆつくりと整えながら、立ち上がる。
姉様たち、どうか一瞬でいい。

あの男の動きを封じる力を貸して。

松永久秀という男が私欲のために、こんなことをしているというのなら。

（一瞬でいい）

それであの場で戦う二人には終わらせられるはずだ。

深い呼吸を繰り返し、意識を世界になじませてゆく。

次第に重さを感じなくなる身体で、私はゆつくりと舞い始めた。

闇の中で自分の姿だけをぼんやりと感じる。

その中から闇の塊を探り、舞扇に絡めて、ついと引く。

一際大きな音に引かれて目を開いた私は、片倉が松永を吹き飛ばす姿を見た。

願っていたはずなのに、それを見てもなんとも思えなかった。

止めを刺そうとさえ、思わなかった。

12#仇討ち(後書き)

一度書いて、書き直しました。

だって、ねえ、あまりに片倉落ちになりすぎてるんで。

これじゃあ、あれです。

他のキャラに会えない、ってか佐助とか幸村とか出てきたばかりなのに不憫すぎる。

(2011/08/05)

13#伝わらない I LOVE YOU

夢現に彷徨わせた手が大きくて強い力で握られる。
ここにいる、と強く主張しているのは誰だろうか。

「なんで、俺じゃねえんだ」

苦しそうな声は伊達政宗のものだ。

まだ怪我が痛むのだろうか。

手を握り返し、ゆっくりと目を開く。

今まで見たこともない、いつもの強気からは想像もつかない弱々しい目が私を見ている。

「……政宗様、まだ怪我が痛むのですか？」

問いかけたが、首を横に振って、顔を背けられた。

松永を倒してから私は元の屋敷に戻り、与えられた部屋で休んでいた。

当然ながら、伊達政宗と片倉も別な部屋で休んでいたのだが、この部屋にいるということはあの戦いで傷が開いたのかとも思ったのだ。

「政宗様？」

身体を起こすと、慌てて手を貸してくれる。

「無理すんな」

「もう大丈夫ですよ」

顔を合わせて微笑むと、伊達政宗は少しの間私を見つめ。

「S o r r y」

私を抱き寄せて、謝罪した。

何を謝られているのか、私にはさっぱりわからない。

「痛むなら、また」

息が詰まる程強く抱きしめられて、それ以上の言葉は継げなかった。

「なんで俺を助ける？」

侍が嫌いだから手を貸さねえって、力を使わねえって言ったのはアンタだろ」

確かにそう言ったし、そのつもりだった。

だが、奥州には、伊達政宗や片倉には恩がある。

「葉桜を引き留めたのは俺の勝手だった。

それはアンタだってわかってたはずだろう。

なのに、なんで俺を助けた。

小十郎が俺を助けろと頼んだからか？」

ここで何故片倉の名前が出てくるのだろうか。

腕を緩めた伊達政宗が左手で私の顎を持ち上げる。

伊達政宗の息が私の鼻先にかかる。

「なんで、この俺じゃなく、小十郎だ？」

苦しそうな顔で言われる言葉の意味が、わからない。

「片倉様には恩があります。

それだけです」

「違うだろ。

アンタは小十郎が……むぐっ」

両手が勝手に動いて、伊達政宗の口を塞ぐ。

その先は言わせてはいけない言葉のはずだ。

「何を仰られているのか、わかりません。

私はただ貴方がたに恩を返すために舞ったに過ぎません」

自分でも白々しい言葉だと思うのだから、聞いている伊達政宗は尚更だろう。

恩を返すため、それから私怨のために手を貸した。

……前者はともかく、後者は褒められたものじゃない。

私は彼らを利用したのだから。

だからこそ、私はそれに気づいてはいけないのだ。

「政宗様、私は……もう奥州には戻れません」

伊達政宗が私を拘束する手を避け、静かに笑う。

奥州を出る前にはこうなることは決まっていた気がする。

「これまでのご温情に感謝いたします。

今後の政宗様の御健康を遠くから祈っています」

もしもの話を口にはできない。
それを言って、期待させることだって残酷だろう。

伊達政宗は悔しげに奥歯を噛みしめると、急に私の肩を押した。
背中に軽い衝撃があつて、仰向けに倒れこんだ私の頭の両側に手を付くから、なんだかまるで私が伊達政宗に襲われているように見える。

「I love you」

でも、そんな風な置いて行かれる子供みたいな目で襲う人がどこにいるだろう。

「政宗様？」

「I need you」

「南蛮語では何を言われているのかわかりませんよ」

伊達政宗は私に覆いかぶさったまま、私を抱きしめる。

「……I miss you」

切なくて、甘やかで、でもわからない言葉ばかりで。
ただ泣きたくなるほどの切なさが私に届く。

いつからか伊達政宗から向けられる瞳が変化していたことには気づいていた。

珍しい玩具のようだったのに、いつのまにか希う人の目で私を見ていた。

でも、私にはそれに応えることができない。

「いつきをよろしくお願いします。
あの子は無茶をするから」

そつと手を伸ばし、伊達政宗の髪に触れる。
ゆっくりとなでると、私より何倍も大きな身体がびくりと跳ね上がった。

それから何かを堪えるようにした後で、ごろりと私の隣に寝転がる。

一人用の布団に眠っているから、彼の身体の半分は布団から転がり落ちてしまっているのではないだろうか。

「小十郎、いるんだろ」

伊達政宗が声をかけると、部屋の戸が開いて、誰かが部屋に入ってきた気配がある。

伊達政宗は立ち上がり、入れ替わるように戸口へと向かった。
そこで立ち止まる。

「葉桜を説得しろ」

「……政宗様」

「わかったな」

自分にできないからって、片倉に丸投げするのはいかなものだ
ろうか。

それに、それが私に聞こえていては台無しではないだろうか。

私が小さな笑い声をあげると、伊達政宗は舌打ちして離れていった。

それを少しの間見送ってから、片倉が私の布団の傍らに来る。

「政宗様が我俣を言って、すまない」

「片倉様が謝ることではないでしょう」

「いや、俺が……」

片倉が言葉を切ったのは、私が起き上がったせいだろうか。

完全に上体を起こした私をしばらく見てから、片倉は姿勢を正し、深々と頭を下げた。

「か、片倉様」

戸惑う私に片倉は言葉を紡ぐ。

「アンタには感謝してもしきれねえ。

政宗様への助力、本当に感謝している」

そんな風に頭を下げられるような人間じゃないのに、私は化け物なのに。

私は布団を出て、片倉の前に膝を進める。

「やめてください、片倉様。

私はただ……」

顔を上げた片倉と目が合ってしまった私は、それ以上言葉を継げなかった。

最初に会ったときと同じ真摯な眼差し、その奥に陰っているのは誰に対する想いだろう。

「ただ、なんだ」

問い返され、ビクリと自分の身体が震えるのがわかった。
別に脅されているような声音じゃない。

子供に諭す時のような、そんな声。

ただ、なんだと言おうとしたのか、もう頭の中が真っ白になって
しまって、わからない。

「葉桜？」

私の顔を覗き込む片倉は、さきほどの伊達政宗よりもよっぽど遠
い位置にいる。

それなのに、この違いはなんだというのだろう。

「ちょっといいか？」

片倉の手が私の額に触れたら、私の緊張はもう限界で。
もう完全に動けなくなってしまった。

13#伝わらない I LOVE YOU (後書き)

うーん、どうやっても小十郎落ちから修正できない……

幸村とか佐助に行くには、やっぱり最初からあっち側にいないとだめかな？

(2011/08/09)

14#伝えられない気持ち

里を出るまで、私は男というものには数えるほどしか会ったことがなかった。

それも里に出入りする行商人だけだ。

里を出てからは、先代の舞姫と暮らしていた最後の月日、私は彼女が伴侶と選んだ者と三人で暮らしていた。

彼の気持ちは完全に姉様に向いていて、私も兄として慕っていただけだ。

里の外のことをその兄に教わっていたおかげで、一人になってもそれなりにやってこれたわけだ。

自慢ではないが、一人になってから言い寄られたことも何度かあるし、男に対して免疫だってあるほうだ。

舞姫と知らただけで、寝室に連れ込まれ、押し倒されたことだつてある。

危ないときは何度かあったが、それでも運良く助かってきた。

「少し熱がある、か」

それなのに、なんでこの人のこんな行動一つで私は動揺してしまっているのか。

この人には疚しい心ひとつないというのに。

「葉桜の力はなんの代償もなく無限に使えるわけじゃねえんだな」

目の前で、苦い笑いを浮かべるらしくない片倉の顔から目が離せない。

「それなのに、無理ばかりさせてすまねえ」

どうして片倉が謝るのだろうか。

私が私の意思でしたことであって、片倉に謝罪されるようなことはないのに。

むしろ謝るのは私の方なのに。

「政宗様は葉桜を引き留めろといったが、俺はもう十分すぎるほどアンタに助けられちゃった。

だから、これ以上願うことはできねえ」

寂しそうな目で、でも微笑んでいてくれる片倉。

最初は強面で、堅物で、なんて思ってた、今は申し訳ない気分だ。

「今度奥州に来ることがあったら、遠慮無く頼ってきてくれ。なんでも力になってやる」

「片倉様……」

「達者でな、葉桜」

「あ……」

あまりにもあっさりと引き下がられてしまったのは私のほうが戸惑ってしまう。

立ち上がりかける片倉の服の袖を思わず握ってしまったのは、そのせいだ。

「葉桜？」

「あ、あの……いや、ええと、その」

私がなにか言おうとしているのを片倉は辛抱強く待っていてい

る。

何か言わなくてはいけないと思うのに、何を言えいいのかかわからない。

「私、本当に行ってもいいんですか？」

だって、片倉様は政宗様の命に逆らってしまうのに、それなのに私の勝手で頼ったりなんてしていいんですか？

迷惑じゃないですか？」

問いかけているのに、自分で否定を返して欲しいと望んでいるのがわかる。

そんな卑怯な自分なのに、それなのに、本当に頼ったりしてもいいのだろうか。

やっぱり、こんな外見も内面も幼い私は迷惑だと言われるだろうか。

不安な気持ちで片倉を見ると、急に頭に大きな手が乗せられ、優しく撫でられた。

侍なのに、土の匂いのする優しい手だ。

「迷惑なはずないだろう。

むしろ、もう少し甘えたほうがいい。

アンタはまだ子供なんだから」

片倉の言葉にぴくりと身体が震えた。

「子供」だから、という言葉に少なからず落胆したことは間違いない。

片倉にとって私が子供だというのは間違いないのに、何故自分は今も落ち込んでいるのだろうか。

「……子供じゃ、ありません」

気がつくのと、私はそれを口にしていた。

「私たちー舞姫は力が強いほど、成長が遅くなるんです。

ほとんどのものは舞姫を継いだ時に。

私はー里を失った十二の頃から六年間ずっと、この姿のままです」

この人に言っても仕方ないのに、どうして私はこんな話をしていくんだろう。

もし私が年齢通りの外見だったとしても、片倉にとっては子供と変わらない。

どうしたって、私じゃ吊り合わない。

片倉は困った様子で私を見ている。

困らせたいわけじゃないけれど、自分でどうしたいのかわからない。

俯く私から片倉の手が離れてゆく。

……こんなことを言ったところで、自分が化け物だと証明するだけなのに、本当に自分がどうしたいのかわからない。

「……もしも……」

紡ぎかけた言葉を口を引き結んで閉ざす。

これ以上、私は片倉に何を言おうというのか。

「政宗様は私自身がきちんと話して説得しますから、安心してください。

片倉様の手を煩わせたりはいたしません、から」

座ったまま、少し離れて頭を床に付ける。

「今まで、ありがとうございました」

最後にふわりと笑ってから、三つ指をついて、ゆっくりと頭をさげる。

額が床に着くと、ひんやりとした冷たさを感じる。

「葉桜」

片倉様は何度か私を呼んだけれど、顔は上げられない。
泣きたくなてないのに、涙が溢れそうで、目を開けられない。
目の前にいる片倉が立ち上がる気配があり、それが静かに離れていった。

部屋で一人になってから、ごろりと布団に横になる。

一晩で力は回復している気がするのに、ひどく疲れていて、眠い。
涙が、目元から零れ落ちる涙が熱い。

片倉を困らせるつもりなんてなかった。

でも、どこかで引き止めて欲しいと思ったんだ。

奥州は寒いけど、人の心が暖かくて、居心地が良くて、本当に私を望んでくれるなら、願うことが許されるのなら、戻りたいって。

「馬鹿だなあ、私」

私みたいな化け物が、自分の幸せなんて願っていいはずなのに。
片倉も伊達政宗もいつきも、奥州の者は自然に接してくれるから、
つい忘れてしまいうようになる。

「……馬鹿だなあ」

もう一度つぶやいた言葉は、誰もいない室内に寂しく響いて消えた。

14#伝えられない気持ち（後書き）

飄々とした主人公で書いてみたい。

あと、某サイトの夢に影響されて、元親で書きたくなってきました。
……とりあえず、逆ハーをやるなら奥州で始めたらだめというのがよくわかりました。

そろそろこの話も終にしてしまおう、うん。

（2011／08／19）

15#慶次との再会

どれくらいそうして、寝転んでいただろう。

私はのろのろと起き上がり、武田側の用意したものではなく、自分の手荷物から奥州で用意された藍染の着物と袴を身につけた。

それから、舞扇を差して、名を呼ぶ。

「佐助、いる？」

気配を探ったわけじゃない。

ただ、あの無遠慮な忍はいる気がただけだ。

でも、声に応える者はない。

いないならいいでもない。

「誰か忍んでいるなら、信玄様に伝えてください。

舞姫は南に行きます、と」

それから、手荷物を肩にかけ、部屋を出る。

「本当に、行っちゃまうのか？」

背中に寂しげな伊達政宗の声がかかり、私は振り返った。

そこには着流しのままの青年が立っているはずなのに、私にはひどく小さな少年がいるように見える。

なんでこの人はこんなにも私を気にかけてくれるのだろうか。

「行くな」

縋る言葉なんて、この人には似つかわしくない。

「……強く、あってください。

想いを強く、心を強く。

後ろなんて振り返らずに、走り続けてください。

もしも政宗様が天下を統一なされたならば、その時にまたお会いしましょう」

悔しげに齒噛みする伊達政宗は言う。

「アンタ、小十郎が好きなんだろ。

だったら、奥州にいりゃあいいじゃねえか」

本音を言えば、奥州に帰りたい。

今すぐにでも撤回して、あの居心地のいい場所に戻りたい。

困った末に微笑んでみせると、伊達政宗は私に向かって腕を伸ばしたが、結局は手前で止めて、触れることはなかった。

「俺の誘いを断ったこと、後悔させてやるよ」

鼻で笑って、足音荒く立ち去る伊達政宗の姿が見えなくなったら、私は彼とは反対の方向に歩き出した。

後悔なら、奥州を離れる時からすでにしている。

きっと私はどこかで道を間違えたのだ。

出会ってはならない人に出会ってしまった。
だからこんなにも。

「葉桜」

目の前に現れた覚えのある人を前に目を見開き、それから私は久しぶりに顔を歪めた。

「慶次……」

私の倍はある長身の体躯が近づき、私を包み込む。

派手な衣装はすぐに見えなくなり、私は素直にその胸に顔を埋めた。

「久しぶりだな、葉桜」

「っ」

ごく普通の挨拶だったのに、あっという間に涙が溢れて、止まらなくて。

嗚咽を殺す私を男はただそっと抱きしめてくれていた。

どのくらいの時間が経っただろう。

男に――前田慶次に抱えられて移動した部屋で、私が泣き腫らした目でぼんやりしていると、目元に冷たい手ぬぐいがあてられた。

「あり、がと」

目元を抑えたまま礼を言うと、彼からは少し寂しそうな声で問われる。

「葉桜は出会っちゃったのかい？」

「アンタのミヤに」

慶次とはひとりになってから、三年前からの付き合いだ。

彼は私の素性のすべてを知るわけではないが、兄のような優しさ

で私を立てせて、前に進ませてくれた。

だから、ミヤがどういう意味なのかも知っている。

「わから、ない」

「じゃあなんでそんな顔で泣いてんだい？」

どれだけ聞かれても、私は答えられなくて、ただ俯いたまま首を振るしかなかった。

「……奥州にいたんだって？」

びくりと身体を震わせ、顔を上げると、慶次が優しい顔で私を覗き込んでいた。

どうして、なんて聞くつもりはない。

「俺は会ったことないけど、いい男らしいじゃないか。

奥州の竜とその右目は」

会ったんだろう、と聞かれて、引き結んだ口の端が下がる。

そんな風に面白そうに言わないでほしい。

伊達政宗も、片倉も、そんな風に奇異の目で見られることなんて望まない。

「優しい、人達だったよ。

寒いけど、心の暖かい国だった。

……留まってもいいかと、少し考えた」

慶次の大きな手が私の頭に置かれ、軽く叩いてからくしゃくしゃと撫でられる。

暖かくて、優しいこの手に、何度も救われたはずなのに、それで

思い出したのは片倉の事だった。

「……慶次、なんで私が舞姫なのかな。
なんで、私だけが舞姫なのかな。
どうして、姉様たちは私を救けたのかな……」

他にいくらでも力の強い人はいたのに、選ばれたのは私だった。
先代の姉様が舞姫であったことだって、せいぜい私が独り立ちで
きるまでの間のつなぎでしかなかった。

舞姫でなければ、あの手をとっても良かったらうか。
でも、舞姫でなければ、きっと彼らとは出会えなかった。

「どうしよう、慶次。

私、もう舞姫を続けられない」

できるはずもない願いを口にする。
自分しかいないからと心を決めていたはずなのに、それなのに私
は。

「舞えないよ」

泣いてしまいそうな私に、慶次はただ柔らかく笑いかけてくれた。

「……じゃあ、やめちまえばいいよ。
葉桜が一人で背負うことないんだ。
アンタの姉さん達だって、きっと許してくれるさ」

アンタが恋をすることを。

慶次はいつだって、私のほしい答えをくれる。
でも、忘れちゃいけない。

「ありがとう……」

甘えたいけど、甘えちゃいけない。
これは私が決めるべきことなんだ。

一度目を閉じ、強く意識を切り替える。
そうしてから、慶次を見ると、彼は寂しそうに笑っていた。

15#慶次との再会（後書き）

お久しぶりです。

最近やっとBASARAやりました。

PSPですけど。

でも、きっと偽物具合は変わらないと思います（え

（2011／08／30）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0990v/>

あなたが笑っていただける世界のために（戦国BASARA）

2011年11月13日19時39分発行